

第一章 宇治八の宮の物語 隠遁者八の宮

[第一段 八の宮の家系と家族]

そのころ(ところでその頃)、世に数まへられたまはぬ古宮おはしけり(世間から忘れられていらっしやった老齡の親王がおいででした)。*注に<『完訳』は「新たな物語の開始を告げる常套表現。前三帖とほぼ同時期」。『新大系』は「紅梅巻と同様の常套的な冒頭形式。漠然とした過去の設定で、新たな物語を開始させる」と注す。>とある。紅梅巻の巻序の問題があるので、当巻が竹河巻に続くものかどうか注意する必要はあるが、取り敢えずは左様に考えて読み進む他は無い。それにしても、「前三帖とほぼ同時期」という『完訳』の説明は目に余る。巻序問題を左て置いて、匂兵部卿巻と竹河巻は十年間ほどに渡る話が語られていて、それも薫君 15 歳から 23 歳までの多感な成長期のことであり、その内のどの時点かによって、話の意味が相当に違ってくるというのに、「前三帖とほぼ同時期」とは無責任にも程がある。また、『新大系』の言う「漠然とした過去の設定」を示す語として広く認識されている言い方は<昔々>であって、「そのころ」という語の説明としては到底受け入れられるものではない。こんな頼りなさでは先が思い遣られる所だが、かと言って、注釈なしで私にこの物語が読める筈もない。お願いしますよ、本当に。で、「そのころ」だが、是が話題転換に先立つ副詞語用である事は間違いない。で、「その」の「そ」だが、この中間変数への代入値は直接前段の話を受ける場合と前段の話の背景を受ける場合とがあり、直接つながる同じ話題での別事情なら<ちょうどその頃、他方では>で、背景事情が重なる別の話題なら<ところでその頃、他方では>という言い方になる。此処では、前巻の竹河巻が藤原右家の悪御達の話という設定だったので、是を一巻完結の別冊と見做すなら(今の所そう見做そうと思っているが、是も疑義はある)、当巻が前巻の話の直接引き継ぐことはなく、別の話題になるのは必至で<ところでその頃>という言い方になる。で、「その頃」を普通に考えれば、時系列としては竹河巻末の時点と同年ないしその前後 1~2 年の間の事柄、と読者たる私は想定する。であれば、竹河巻末は薫君 23 歳秋の話とされているが、その年齢推定根拠は、薫君が宰相中将から中納言に昇進した時の、具体的には同時に昇進した各諸侯の様子などが玉鬘目線で竹河巻五章に語られていて、その薫君の中納言昇進が 23 歳の秋の事であることは、当・橋姫巻に続く次・椎本巻に語られていることから導かれている、というのが私が竹河巻五章一段の注釈から得た理解だ。ところで、この橋姫巻の冒頭概要には「薫君の宰相中将時代二十二歳秋から十月までの物語」とある。是は竹河巻末より一年前の話ということになり、「その頃」の範囲内ではあると思うが、その裏付けはまだ語られていない。もし、この裏付けが語られないまま椎本巻の薫君中納言昇進話が語られてしまうと、竹河巻末の薫君 23 歳という認識自体が単なる当て図法に過ぎないこととなり、確たる根拠を失う。必ずや、それまでに当巻の何処かで直接明示なり、傍証なりが語られるものと期待しているが、この続編の巻序や年立ての混乱ぶりを見ると、一抹の不安を覚える。実に変なところでスリル感を味わうことになっているが、此処が崩れると匂宮巻まで遡って年立てを見直さなければならないので、本当に大変な問題だ。とにかく、今は薫君 22 歳の秋の話と思って読み進む他は無い。ただし、以下の文は暫くの間は、この古宮の事情説明を昔に遡って語るようなので、話が今の事柄に進んだ時点の年代が<薫君 22 歳の秋>だと確認できるかどうか、が鍵となる。念のためにノートするが、冒頭の「そのころ」で昔に戻るのではない。昔に遡るのは以下の文からだ。

母方なども(母方の実家も)、やむごとなくものしたまひて(高貴な家柄でいらっしやって)、*筋異なるべきおぼえなどおはしけるを(春宮候補でもいらっしやったが)、時移りて(時勢が変わって)、世の中にはしたなめられたまひける紛れに(立太子に失敗なされた政争で)、なかなかいと名残なく(無残に失脚して)、御後見などももの恨めしき心々にて(後見勢力は失意のままに)、*かたがたにつけて(各自なりに)、世を背き去りつつ(辞職隠居なり出家なりして)、公私に抛り

所なく(公私共に頼り先がなく)、さし放たれたまへるやうなり(世間から置き去りにされていらっしやるようでした)。*「筋異なるべきおぼえなどおはしけるを」は注に<『集成』は「立太子の可能性があったことをいう」。『完訳』は「皇太子となり即位するにふさわしい親王と、世間から噂された」と注す。>とある。こういう曖昧表現は言われると分かる気がするが、とても私には直ぐには、その具体的な内容が思い付かない。つくづく事物の周辺事情なり世の中なりを知っていないと読めないことを思い知る。*「かたがたにつけて世を背き去りつつ」は注に<『完訳』は「官界からの引退や、出家遁世」と注す。>とある。

*北の方も、*昔の大臣の御女なりける(奥方も昔の大臣家の御息女だったので)、あはれに心細く(この凋落が悲しく心細く)、*親たちの思しおきてたりしさまなど思ひ出でたまふに(親たちが自分の立后で摂関家を期していたことなどを思い出しなされると)、たとしへなきこと多かれど(比べものにならない惨めな暮らしぶりだが)、*古き御契りの二つなきばかりを(長年連れ添った御夫婦縁の他に浮気が無い心の穏やかさを)、憂き世の慰めにて(儉しい生活の気休めにして)、かたみにまたなく頼み交はしたまへり(互いに大事にして信頼し合っていたらっしやいました)。*「北の方」は<奥方>という言い方だが、妙に新鮮に感じた。そうか、親王の妻であっても、帝や東宮の妃でなければ女御や更衣などとは呼ばれないワケだ。公的な身分は無いのだ。そう言えば、故兵部卿宮の奥方も「北の方」だったし、式部卿宮の奥方も「北の方」だったし、むしろ邸を構えるほどの貴家でなければ「北の方」でさえないのかとも知れない。紫君も何度かは「北の方」と呼ばれていたかと思う。しかし、源氏は臣籍降下して宮家では無いので、むしろ「北の方」は普通の呼称にも見えるが、紫君は邸内での視点での描写が多かった所為か「上」という呼称の方が多かった。どうも「上」の方が「北の方」よりも偉そうに、というか尊く聞こえるが、どちらも「御方」のような一般敬称とは違って、家の首座という立場を示す語ではありそうだ。*「昔の大臣の御女なりける」は、その通りの説明ではあるのだろうが、「大臣(おとど)」が「御女(おおんむすめ)」を嫁がせるのだから、その姫が何番目の姫かにも拠るだろうが、この古宮は相当に有望視されていたんだろう。大臣家は藤原氏だろうし、それも大臣は長者だ。「むかしのおとど」とは、どうやら桐壺帝代の右大臣らしい。*「親たちの思しおきてたりしさま」は注に<立後のこと。>とある。「など」が<摂関家を狙う>なのだろう。*「古き御契りの二つなきばかりを、憂き世の慰めにて、かたみにまたなく頼み交はしたまへり」は正に庶民の穏やかな暮らしぶりそのものであって、時代や制度が変わっても結局ヒトの暮らしぶりは同じで変わらないんだなあ、みたいな気もするが、是が決して甲斐性無し生き様などではなく、宝も糞もあるこの世の中で、個々人がもがいて努力した結果に落ち着いた形態の一つ、と知るべきなんだろうと思う。やはり一夫一婦の子育て夫婦を標準的な家族構成と位置付けて、それが持続できる社会制度の構築を目論むのは正しい政治認識だろう。それより上の生活もあれば下の生活もあるだろうし、制度から外れた生活があるのは、むしろ健全な多様性だろうが、標準家族構成を社会的に価値あるものとして政策の中心に見据えることは非常に重要だと思う。今更に政府は子育て支援を意識しているようだが、高度成長の混乱期に成長基調の御蔭で何とかやって来た家族構成も、今後の安定期を目指すに当たって重大な役割を担っているという位置付けを再認識すべきであり、産業構造や地域社会の再構築の土台となりえる教育制度および機関に万全の体制を期す事が急務であり、恐らく其処にこの国の命運が掛かっている。

*年ごろ経るに(夫婦になって何年か過ぎて)、御子ものしたまはで心もとなかりければ(御子を儲けなさらず心許無かったので)、さうざうしくつれづれなる慰めに(物足りなく張り合いの無い日々の救いになるようにと)、「いかで、をかしからむ稚児もがな(どうか可愛い子供が欲しいものだ)」と、宮ぞ時々思しのたまひけるに(と古宮が再三思いを仰っていたところ)、めづらしく(待ち焦がれていた)、女君のいとつくしげなる(可愛らしい女の子が)、生まれたまへり(お

生まれになりました)。 *「年ごろ経るに」は<夫婦になって長年が過ぎたが>ということのようで、この「年ごろ」には凋落前の時期も含まれているのだろうが、この夫婦の年齢や結婚時期や失脚時期などは不明で、今ひとつ手応えが無い。それでも、「さうざうしくつれづれなる慰めに」は閑職生活を示していそうなので、子供が出来たのは失脚後のような印象だ。

これを限りなくあはれと思ひかしづききこえたまふに(この子を限りなく愛しいと大事に御育て申しなさっていらっしゃると)、さし続きけしきばみたまひて(直ぐ続いて懐妊なさって)、「このたびは男にても(今度は男の子が良い)」など思したるに(などとお思いだったが)、同じさまにて(二人目も同様に女の子で)、平らかにはしたまひながら(無事に出産はなされたものの)、*いといたくわづらひて亡せたまひぬ(母体の産後の肥立ちが悪く奥方はお亡くなりになってしまいました)。宮、*あさましう思し惑ふ(古宮は驚き途方に暮れなさいます)。 *「いといたくわづらひて亡せたまひぬ」は注に<係助詞「は」連用修飾語「平らかに」に付いて無事出産を強調するニュアンスを添える。しかし産後の肥立ちが悪くて母親は亡くなる。>とある。上文の「平らかにはしたまひながら」の「は」が出産に限定して「平らか」なことを述べて、「ながら」の逆接で以下に<平らかならず>ことを述べる、という構文自体は分かり易いが、「いたくわづらひて」が<産後の肥立ちが悪い>という意味になるのが少し分かり難い。「いたくわづらひて」というだけでは、他の体調不良の可能性も有りそうに思いがちだが、後産後の体調再回復に失敗したことの全てを<産後の肥立ちが悪い>と言い表すとしたら、そういうことの意味が私に足りない、ということのようだ。 *「あさまし」は<意外性に驚く>で善悪どちらにも使う、とのことだが、此処では当然に悪い話だ。一読者としても、慎ましく夫婦仲良く暮らして、可愛い女の子も出来たというのに、産後に急死とは悼まれる。まだ、この古宮の素性や年齢は明かされていないが、あまり若くはないが幼い子がいる、みたいな概要は知れる。

[第二段 八の宮と娘たちの生活]

「*あり経るにつけても(在世で生きるにも)、いとはしたなく(とても身の置き所無く)、堪へがたきこと多かる世なれど(悲しい事が多い人生だが)、見捨てがたくあはれなる人の御ありさま、心ざまに(忘れられない愛しい妻の姿や人柄に)、かけとどめらるるほだしにてこそ(引き止められる留め綱で)、過ぐし来つれ(暮らして来たが)、一人とまりて(一人残されて)、いとどすさまじくもあるべきかな(ますます気がすさむことだ)。 *「ありふる」は<生きて年月が経つ=生きている>という意味にしては厭に回りくどい言い方に見えるが、下に「本意も遂げまほしう(出家したい)」とあるので、是が<在世で生きる>という言い方だと分かる。

いはけなき人びとをも(幼い子供たちを)、一人はぐくみ立てむほど(男手一つで育てるのは)、限りある身にて(王家身分の者としては)、いと*をこがましう(実に下品で)、人悪ろかるべきこと(外聞の悪いことだ)」 *「をこがまし」は普通、身分の低い者が分不相応に出過ぎた真似をする、ことを言うように思うが、此処では<身分の高い者が分不相応に卑しい真似をする→下品だ>という言い方なのだろう。

と思し立ちて(と考えついて)、本意も遂げまほしうしたまひけれど(出家しようとなさったが)、見譲る方なくて残しとどめむを(娘の世話を任せる宛も無いままに置き去りにするのを)、いみじう思したゆたひつつ(忍び難く思い留まりながら)、年月も経れば(月日が経って)、おのおのおよすけまさりたまふさま(娘たちがそれぞれ成長なさる様子の)、容貌の、うつくしうあらまほしき

を(姿の可愛らしく秀でているのを)、明け暮れの御慰めにて(日々の張り合いとして)、おのづから見過ぐしたまふ(そのまま見守りなさいます)。

後に生まれたまひし君をば(後にお生まれになった姫君を)、さぶらふ人びとも(仕える女房たちも)、「いでや、*折ふし心憂く(本当に折合いの悪いこと)」など、うちつぶやきつつ(などと母君が死んだ不運を口にしながら)、心に入れても扱ひきこえざりけれど(熱心には御世話申し上げなかったが)、限りのさまにて(奥方が臨終の時に)、何ごとも思し分かざりしほどながら(もう朦朧としていらっしゃりながら)、これをいと心苦しと思ひて(この姫君を不憫に思って)、*「折ふし」はくその時々、時節>と古語辞典にあるが、此处での語用を見る限りはく頃合い一巡り合わせ一折合い>くらいの言い方にみえる。

「ただ(せめて)、この君を形見に見たまひて(この子を私の形見だと思いなさって)、あはれと思せ(お可愛がりください)」とばかり、ただ一言なむ(とのたった一言を)、宮に聞こえ置きたまひければ(宮にご遺言なさっていたので)、

「『*前の世の契りもつらき折ふしなれど(此处で死に別れる前世の宿縁も辛い巡り合わせだが)、*さるべきにこそはありけめ(この子は自分の生まれ変わりという運命に違いない)』、と今はと見えしまで(と今際の際まで)、いとあはれと思ひて(我が子可愛さに)、うしろめたげにのたまひしを(亡き妻が次女姫の行く末を案じて仰っていたものを)」と、思し出でつつ(と思い出しなさっては)、*「さきのよの～」は「思し出でつつ」までが、「後に生まれたまひし君をば～いとかなしうしたてまつりたまふ」という文全体に於いて挿入句となっている構文だ。そして、この挿入句はそれ自体がとても変則的な構文になっていて、「前の世の～ありけめ」は奥方の心中に即して語る宮の内心文で、「と今はと～あはれと思ひて」は奥方の心中を慮って語る宮の内心文で、「うしろめたげにのたまひしを」は奥方の様子を思い出して語る宮の内心文、ということらしい。*「さるべき」の「さる」は「この君を形見に見たまひて」で、「べし」はそれを妥当ならしめている「前の世の契り」に付いての奥方の解釈、なのだろう。

この君をしも(この姫君のことを)、いとかなしうしたてまつりたまふ(宮はとても可愛がって御世話申しなさいます)。

容貌なむまことにいとうつくしう(この次女姫の顔立ちというものはまことに端正で)、ゆゆしきまでものしたまひける(不吉なほどでいらっしゃいます)。

姫君は(姉姫は)、心ばせ静かによしある方にて(気立てが穏やかで教養高い方なので)、見る目もてなしも(姿も物腰も)、気高く心にくきさまぞしたまへる(気品があって卒が無くいらっしゃいます)。「姫君」はく姉姫>のことらしい。「姫君は」の「は」が「姫君」を特に取り上げて語る意の係助詞なので、上の次女姫の話題では無さそうに聞こえるので、姉姫のことらしいと察しは付くが、「姫君」という語の語用自体は非常に紛らわしい。

いたはしくやむごとなき筋はまさりて(大切にされて高貴さに於いては長女が次女に勝って)、いづれをも(どちらをも)、さまさまに思ひかしづききこえたまへど(それぞれの方針で育て申しなさるが)、かなはぬこと多く(無職で稼ぎが無いので、収支が適わぬ事が多くて)、年月に添へて(年追う毎に)、宮の内も寂しくのみなりまさる(邸内の雇い人も少なくなる一方です)。

さぶらひし人も(側仕えの女房も)、たつきなき心地するに(家計の苦しさが心細く)、え忍びあへず(とても辛抱堪らず)、次々に従ひてまかで散りつつ(次々と他家の誘いに従って辞めて去って行き)、若君の御乳母も(妹姫の御乳母も)、さる騒ぎに(母君の急死騒ぎで)、はかばかしき人をしも(優れた人材というものを)、選りあへたまはざりければ(選んで任せることがお出来なさらなかったのも)、ほどにつけたる心浅さにて(其相応の浅ましきで)、幼きほどを見捨てたてまつりにければ(幼い妹姫を見捨て申してしまったのも)、ただ宮ぞはぐくみたまふ(宮が直接御育て申しなさいます)。

[第三段 八の宮の仏道精進の生活]

さすがに、広くおもしろき宮の、池、山などのけしきばかり昔に変はらで(さすがに広く興味ある宮邸の庭の池や築山の形だけは昔と変わらないものの)、いといたう荒れまざるを、つれづれと眺めたまふ(手入れが行き届かずに、とてもひどく荒れて行くのを宮は遣る瀬無く眺めていらっしゃる)。

*家司なども(家政官なども)、*むねむねしき人もなきままに(有力者が就かないままに)、草青やかに繁り(庭草が青々と茂って)、軒のしのぶぞ(軒先に生えた忍草が)、所え顔に青みわたれる(我が物顔に青く一面を覆っています)。 *「家司(けいし)」は注にく『集成』は「親王、摂関、三位以上の家の家政を取り扱う事務官。四位五位の者から選ばれた」と注す。>とある。この説明は古語辞典などの語訳とほぼ同じで、何故この語だけこのような注記があるのか不思議だが、語訳自体は改めて「家司」を認識するのに役立つ。そうか、家司は公務員なのか。であれば、宮の個人的使用人では無いから、失脚した宮家に仕える成り手は無かったか。考えてみれば、宮家経営は基本的に天領管理と公費給与で賄われるのだろうが、無職では給与が無いか有っても僅かだろうし、職権が無いので口利き依頼の貢物や有力者との交流が無いので、父帝からの遺贈分であろう当該宮邸および付属荘園からなる資産管理と縁者からの支援以外には収入が無さそう。そして、縁者からの支援も無くなったようなので、自給自足の作物で食いつなぐ他に、現金収入などは無さそう。ジリ貧である。 *「むねむねし」は「宗宗し」で<主となるべき力量がある。おもだっている。>または<しっかりしている。りっぱである。>と大辞泉にある。そして大辞泉では前者の語用事例として当文を上げている。

折々につけたる花紅葉の(四季折々の花や紅葉の)、色をも香をも(色も香も)、同じ心に見はやしたまひしにこそ(夫人と一緒に見て愛でなさってこそ)、慰むことも多かりけれ(慰められることも多かったが)、いとどしく寂しく(夫人亡き後は、寂しさが募るばかりなので)、寄りつかむ方なきままに(庭遊びをすることも無しに)、持仏の御飾りばかりを(仏壇の飾り付けだけに)、わざとせさせたまひて(花枝をお供えなさって)、明け暮れ行ひたまふ(毎日勤行なさいます)。

かかるほどしどもにかかづらふだに(こうして子育てのしがらみで世俗暮らしをしているのでさえ)、*思ひの外に口惜しう(妻の弔いに専念できる出家生活が出来ないのが残念で)、「わが心ながらもかなはざりける契(妻に先立たれる運命とは、思い通りにはならない人生だ)」とおぼゆるを(と思えるのに)、 *「思ひの外に口惜しう」は<出家の本意が果たせず残念だ>という言い方なのだろうが、実際に子育てをすること以上に、修行で善行を積んで悪縁を絶つことの方が尊い、という価値観自体が私には理解出来なくて、この文は手間取る。私の理解では、子育ては理屈抜きで尊いもので、まして「うつくし」い姫君を育てて「御慰め」としているなら、他人の為に生きる喜びに加えてその実務自体が楽しいという、これ以上の幸い

は無いとさえ思えるが、確かに是も一つの理屈に過ぎないかも知れない。この宮は自分の冥利を帝位を襲うことに思い定めたのだろう。そしてその冥利を、利用対象としてではなく、自らの人生として共有したのが奥方だった、のだろう。だから宮にしてみれば、亡き妻を弔うことに専念できる修行生活が最も自分を評価できる生活に思えた、のかも知れない。いや、他人事だし、増して宮家の事情など私に分かる筈もないが、下文に再婚を望まなかったとあることと、此処の<出家が子育てに勝る>という宮の価値観を理解するには、私にはこんなことぐらいしか思い付かない。一応、そういう意味だと思って置く。

まいて(まして)、「何にか、世の人めいて*今さらに(どうして普通の世人のように再婚など望もうか)」とのみ(との一点張り)で、年月に添へて(年追うほどに)、世の中を思し離れつつ(世間離れなさって)、心ばかりは聖になり果てたまひて(剃髪はなさないものの、気持だけは仏僧に成りきっていらして)、故君の亡せたまひにしこなたは(夫人が亡くなって以後は)、例の人のさまなる心ばへなど(普通の人のような女への興味などは)、たはぶれにても思し出でたまはざりけり(冗談事にも思い出しなさいませんでした)。 *「今さらに」は現代語でも<これ以上は不要だ>だが、何が<不要>なのかは明示が無いので文意から拾うしかない。で、下に「故君の亡せたまひにしこなたは、例の人のさまなる心ばへなど、たはぶれにても思し出でたまはざりけり」と女への無関心ぶりが語られているので、「不要」なのは<再婚>だと知れる。

「などか、さしも(どうしてそれほど故人に固執するのか)。別るほどの悲しびは(死別の悲しみは)、また世にたぐひなきやうにのみこそは(他に例えようもないもののように)、おぼゆべかめれど(お思いらしいが)、あり経れば(時が経てば)、さのみやは(そうとばかりも、言っていますまいに)。

なほ、世人になずらふ*御心づかひをしたまひて(やはり世間並みの御配慮をなさって)、いとかく見苦しく(とてもこのように見苦しく)、*たつきなき宮の内も(宮らしからぬ荒れ果てた邸内も)、おのづからもてなさる*わざもや(自然と手入れが行き届くようにも成る訳なんだから、再婚なさるべきです) *「みこころづかひ」は注に<再婚をいう。>とあるが、訳文は<お心づかい>としてある。「心遣ひ」は<気遣い、配慮>であって、この語を<再婚>とは言い難い。この発言者は手入れされていない庭の見苦しさを宮に注意して、有力家から嫁を娶って支援を受けて、庭を整備し直すようにという説得方法で、宮に再婚を進言しているのだろう。「再婚」の語は「わざもや」の中に暗意されている、と読むべきだ。 *「たつきなし」は<たよりない>と古語辞典にある。が、多分「た」は<とても>の意の接頭語で、「付き無し(都合が悪い、不相応だ)」が原義かと思われ、此処の「たつきなし」は<らしからぬ>だろう。「宮の内」は<邸内>で、特に手入れされていない<庭園>のことだろう。 *「わざもや」は<こともあるんだからさ>くらいの言い方。「や」は論旨の有効性を強調すると共に、再考を促す呼び掛けで、そういうことなんだから考え直してみなさいよ、みたいな説得語で、相手の意向を探るという意味では疑問意の係助詞とも言えるかも知れない。

と、人はもどききこえて(と人は宮を注意申して)、何くれと、つきづきしく聞こえごつことも(何かと尤もらしく再婚を勧め申すことも)、*類にふれて多かれど(親類縁者から多く在ったが)、聞こしめし入れざりけり(宮はお聞き入れなさいませんでした)。 *「類にふれて多かれど」は注に<再婚を勧める者も多いが。『集成』は「縁故を通じて多かったが」。『完訳』は「縁故を頼って。零落したとはいえ高貴な八の宮との縁故を望む」と注す。>とある。零落した宮家にも利用価値はあるのか。子供が産めない内親王では厳しいのかも知れないが、胤持ちと分かっている親王なら、御子を儲ければ、その御子に直接の帝位は望めな

いまでも皇位継承権には与れるし、少なくとも皇族会議での発言権が担保されるという、王家以外には適わない価値がありそうだ。野心家の藤原氏はいくらでも居ただろう。

御念誦のひまひまには(念仏唱えの合間合間には)、この君たちをもてあそび(この姫君たちを相手にして)、やうやうおよすけたまへば(次第に成長なさと)、琴習はし、碁打ち、偏つきなど(琴を練習させ、碁打ちを教え、漢字の編当てなど)、はかなき御遊びわざにつけても(他愛無い遊びごとを為さるにつけても)、心ばへどもを見たてまつりたまふに(それぞれの性格を押し申しなさるに)、姫君は、らうらうじく、深く重りかに見えたまふ(姉君は動ぜずに落ち着いて上品に御見えになるし)、若君は、おほどかにらうたげなるさまして、ものづつみしたるけはひに、いとうつくしう(妹君はおっとり幼げに控え目なところがとても可愛らしく)、さまさまにおはす(様々でいらっしやいます)。

[第四段 ある春の日の生活]

春のうららかなる日影に(春のうららかな日の光に)、池の水鳥どもの、羽うち交はしつつ、おのがじしさへづる声などを(池の水鳥たちが羽ばたきを交わしながらさえずり合っている声などを)、常は、はかなきことに見たまひしかども(いつもは聞き流して御覧になっていたが)、つがひ離れぬをうらやましく眺めたまひて(この日はつがいが離れずにいるのを羨ましく眺め為さって)、君たちに、御琴ども教へきこえたまふ(宮は姫君たちに弦楽器を教え申しなさいます)。

いとをかしげに(とても情緒を込めて)、小さき御ほどに(小さい御手で)、とりどり掻き鳴らしたまふ物の音ども(それぞれに掻き鳴らした楽器の音が)、*あはれにをかしく聞こゆれば(健気に可愛らしく聞こえたので)、涙を浮けたまひて(宮は涙を浮かべなさって)、*「あはれにをかしく」はどんな気持なのか。宮は故君を偲んで、姫君たちにその面影を重ねようとしている、という場面ではありそうだ。そして、姫君たちは小さいながらも、それなりに情感を込めて演奏しているようなので、宮はそれを<健気で可愛い>と思ったに違いない。しかし、それ以上の感慨は、どれくらい故君を懐かしく思い出して、子供たちを不憫に思ったか、みたいなことになりそうで、ちょっと見当が付かない。

「うち捨ててつがひ去りにし水鳥の、仮のこの世にたちおくれけむ (和歌 45-01)

「亡き妻の 水取り供養 幾度ぞ (意識 45-01-1)

「雁の子が 仮のこの世に 発ち遅れ (意識 45-01-2)

*注に<八宮の詠歌。無常の世に母親に先立たれた娘たちの不幸をいう。「雁」「仮」の掛詞。「この世」の「こ」に「雁の子」の「子」を響かせる。>とある。子供相手にしては、ずいぶん面倒な詠み方をしたもんだ。「つがひ去りにし水鳥」は、故君にも読めるし、宮自身にも読める。一意は<妻に先立たれて伴侶を失った水取り供養をする夫は、子育てのために俗世にあって出家にも立ち遅れている>と自嘲する。もう一意は<あそこにつがいの水鳥が居るが、此処には夫に先立って行ってしまった母親に、水鳥の雁の子が立ち遅れたように取り残されて寂しくしている>と子供たちを哀れんでいる。

*心尽くしなりや(故君はこの琴の音も聞けずに、無念だったろう)」 *「こころづくし」は<あれこ

れ考えて気をもむこと。>と大辞泉にある。心配する、ということだろうか。渋谷訳文には<気苦勞が絶えない>とある。「尽くす」は<他人のために努力する>だろうか。「なりや」は<なのだろう>または<～なことだ>という他者への感想なので宮自身のことが心配なのではない。また、楽器演奏している子供たちを見て、その子供たちの将来を宮が今<あれこれ考えて悲観する>という場面とも思えない。池の水鳥のつがい姿に思うのは、宮自身と故君との夫婦仲なのだろうから。となると、この「心尽くし」は故君が子供たちを<心配した>ことをいっているように見える。そして、下に「目おし拭ひたまふ」とあるから、「なりや」は宮が故君の無念さを慮った言い方なのだろう。であれば、普通故人を偲ぶ言い方としては<さぞ心残りだっただろう>あたりになりそうだ。

と、目おし拭ひたまふ(と涙を押し拭いなさいます)。

容貌いときよげにおはします宮なり(顔立ちはとても端正でいらっしゃる宮です)。年ごろの御行ひにやせ細りたまひにたれど(年来の勤行暮らしにやせ細りなさっているが)、さてしも、あてになまめきて(それがまた品があつて優美で)、君たちをかしづきたまふ*御心ばへに(姫たちを貴人として御育て申しなさる御教育方針から)、*直衣の萎えばめるを着たまひて(狩衣などの部屋着ではなく、略式ながら正装の着古した上着を着なさつて)、*しどけなき御さま(気負いの無い物腰で)、いと恥づかしげなり(とても気品があります)。*「みこころばへ」は<御意向>だろうが、どういう方向性のことを言っているのか分かり難い。一先ずは、与謝野訳文にある<礼儀をおくずしにならずに>という解釈に従つて置こうかと思う。*「なほし」は礼服ではなく略装ではあるようだが、上着姿ではあるようで、室内で家族の前で過ごすには格式張っているのだろう。*「しどけなし」は<着崩している、だらしない>の他に<親しく打ち解けている>ことでもあるようで、一定の格式を保っているとすれば<力みの無い、当たりの柔らかい>くらいの語感だろうか。

姫君、御硯をやをらひき寄せて(姉姫が硯を静かに引き寄せて)、手習のやうに書き混ぜたまふを(墨に筆をつけてはそのまま、手習いのように硯の摺り面に字を書くように真似なさるのを)、

「これに書きたまへ(これにお書きなさい)。硯には書きつけ*ざなり(硯には書き付けないものです)」*「ざなり」は、打消しの形容助動詞「ざり」の連体形「ざる」に確定判断意の助動詞「なり(成るものだ、～というものです)」がついた「ざるなり」の短縮形、らしい。

とて(と言って宮が)、紙たてまつりたまへば(紙を差し上げなされると)、恥ぢらひて書きたまふ(姫は恥らいながら次の歌をお書きになります)。

「いかでかく巢立ちけるぞと思ふにも、憂き水鳥の契りをぞ知る」(和歌 45-02)

「よくも此処まで育つたと、片身の恩に感じ入る」(意識 45-02)

*注に<大君の唱和歌。「憂き水鳥」に「憂き身」を読み込む。父への感謝と我が身の不運を諦観。>とある。「うち捨ててつがひ去りにし水鳥の」に父の苦勞を思い、「雁の子の世にたちおくれけむ」に自分の成長を照らし見た、のだろうか。水鳥だけに「育つ」を「巢立つ」に訛つたのだろうか。下の「よからねど」はその大喜利発想を<品が無い>と言っている、のだろうか。

よからねど(品の良くない詠みっぷりだが)、その折は(この場では)、いとあはれなりけり(とても味わいがありました)。手は、生ひ先見えて(筆跡は将来性が見えたが)、まだよくも続けたまはぬほどなり(まだ上手ではないお年でした)。

「若君も書きたまへ(小さな人もお書きなさい)」

とあれば(と宮の仰せがあったので)、今すこし幼げに(妹姫も今少し幼げに)、*久しく書き出でたまへり(ゆっくり時間をかけて次の歌を書き上げなさいました)。*「久し」は大辞泉に<(シク形容詞)長い時間がたっている。時間がかかっている。>とある。

「泣く泣くも羽うち着する君なくは、われぞ巢守になりは果てまし」(和歌 45-03)

「君の羽含み無かりせば、われの巢立ちも成からざる」(意識 45-03)

*「打ち着す」は<着せ掛ける、羽織らせる>。「羽うち着する」で<育む←羽含む→守り育てる>と同義ではあるらしい。「巢守(すもり)」は<留守番>でもあるが、「巢守り児(すもりご)」は<孵化(ふか)しないで巢の中に残っている卵。>と大辞泉にある。「なりは果てまし」は<成り果ててしまったらう>。訳文は<泣きながらも羽を着せかけてくださるお父上がいらっしやらなかったら、わたしは大きくなることはできなかったでしょうに>とある。「泣く泣くも」を<苦労して、辛い気持で>とまで言うてしまうと才が立つが、実際の父の姿を<情愛深い>と感じたものと取れば、小さな子の可愛い心情に思える。

御衣どもなど萎えばみて(お召し物などは古びて)、御前にまた人もなく(お部屋には他に女房も居らず)、いと寂しくつれづれげなるに(とても質素で頼りなげながら)、さまざまいとらうたげにてもものしたまふを(それぞれにととても素直でいらっしやるのを)、あはれに心苦しう(不憫で心苦しいと)、いかが思さざらむ(宮はどうしてお思いにならないで居られましようか)。

経を片手に持たまひて(宮は経巻を片手にお持ちになって)、*かつ読みつつ唱歌をしたまふ(経文を琴の曲の節で唱えなさいます)。姫君に琵琶、若君に箏の御琴(姉姫には琵琶、妹姫には十三弦の箏の琴を)、まだ幼けれど(まだ幼かったが)、*常に合はせつつ習ひたまへば(いつも父宮が譜を取るのに合わせて練習なさいましたので)、聞きにくくもあらで(聞きにくい調子外れの演奏ではなく)、いとをかしく聞こゆ(とても情趣ある合奏でした)。*「かつ読みつつ唱歌をしたまふ」は<時に読経し時に琴の練習曲の節を取る>みたいな言い方にも聞こえるが、実際には<経文を曲の節で唱える>ということしか有り得ないだろう。*「常に合はせつつ」は<姉妹がいつも合奏していた>と読むよりも、姉妹はいつも<父宮の節に合わせていた>と読む方が楽しい。

[第五段 八の宮の半生と宇治へ移住]

父帝にも女御にも(古宮は父帝にも母女御にも)、疾く後れきこえたまひて(早く死に別れなさい)、はかばかしき御後見の、取り立てたるおはせざりければ(有力な支援者が縁者の中に取り立てていらっしやらなかった)、才など深くもえ習ひたまはず(学問なども深くは修めなさいる事が出来ずに)、まいて、世の中に住みつく御心おきては(まして処世術などは)、いかでかは知りたまはむ(どうしてお知りになれたでしょう)。「ちちみかどにも～」はいよいよこの古宮の素性が語

られるのかと気負うが、注にある<八宮の父桐壺帝と母女御に先立たれた意。>について、この宮が「八の宮」であることも、父帝が「桐壺帝」であることも、未だ本文では語られていないことに私は注意したい。この宮の素性と現在年齢は匂宮巻以降を読み進む上で、その年立て基盤になると思われる非常に重要な設定であり、厳密に読んで行きたい。また、この重要性を認識しない研究者が居るとは到底考えられず、もし後述に古宮や薫君自身の年齢明示があるなら、此处でその事を指摘して場面背景を示して置かないのは、重大な過失と非難されるべきだ。因みに、古宮の素性については<桐壺帝の御子である事>がこの数行下に「源氏の大殿の御弟におはせしを」と明示され、「八の宮」であることは二章二段で語られるので、それくらいは此处で丁寧に注記説明して置いて欲しかった。

高き人と聞こゆる中にも(尊い王家と申す中でも)、あさましうあてにおほどかなる(この宮は非常に上品でおっとり)、女のやうにおはすれば(女のようでいらっしやるので)、古き世の御宝物(先祖からの御宝物や)、祖父大臣の御処分(おほちおとどのおおんそぶん、母方の祖父大臣からの御遺贈分が)、何やかやと尽きすまじかりけれど(何やかやと無尽蔵かと思われるほどあったが)、行方もなくはかなく失せ果てて(集り取られて散財し)、御調度などばかりなむ(実際にお使いの御道具や物入類などだけが)、わざとうるはしくて多かりける(いやに高級品で多く残っていたのです)。

参り訪らひきこえ(宮邸にはご機嫌伺いに参上して)、心寄せたてまつる人もなし(御見舞品を奉じ申す者も居ません)。つれづれなるままに(退屈紛れに)、*雅楽寮の物の師どもなどやうの、すぐれたるを召し寄せつつ(雅楽寮の教官たちのような舞楽の名手を呼び寄せなさっては)、はかなき遊びに心を入れて、生ひ出でたまへれば(式典の作法や意義に関わらず、芸事自体に熱中してお育ちになったので)、その方は、いとをかしうすぐれたまへり(技芸の方面には詳しく上手なものでした)。*「雅楽寮」は「うたづかさ」と読みがある。「雅楽寮」を「ががくれう」の項目で大辞泉を引くと<律令制の官司の一。治部省に属し、雅楽・楽人などのことをつかさどり、歌舞を教習した。平安時代以降しだいに衰微し、大歌所(おおうたどころ)と楽所(がくしょ)がその機能を代行した。うたりょう。うたづかさ。うたのつかさ。うたまいのつかさ。>とある。注には<治部省所属の雅楽寮。歌師・舞師・笛師・唐楽師・高麗楽師・百済楽師・伎楽師・腰鼓師がいる。>とあるが、そう言われても全く分からないし、今は其処に目が向かないが、このように列記されれば、何となく雅楽寮の様子も窺える気にもなる。

*源氏の大殿の御弟におはせしを(源氏の光君の弟君でいらっしやったが)、冷泉院の春宮におはしましし時(冷泉院が皇太子でいらっしやった時に)、朱雀院の太后の(朱雀院の皇太后でいらした桐壺帝代の弘徽殿女御が)、横様に思し構へて(叛意を企てなさって)、*この宮を、世の中に立ち継ぎたまふべく(この宮を立太子申し上げるべく)、わが御時(朱雀帝代の皇太后位の権勢を以て)、もてかしづきたてまつりける騒ぎに(擁立申し上げた政変に)、あいなく(失敗して)、*あなたさまの御仲らひには(源氏方の藤原左家勢力には)、さし放たれたまひにければ(敵視されなさってしまったので)、いよいよ*かの御つぎつぎになり果てぬる世にて(ますます左家勢力が次々と摂関家を襲う世にあつて)、え交じらひたまはず(宮は孤立なさり)、*また、この年ごろ(そしてそれ以来この方)、かかる聖になり果てて(こうした仏僧生活になり至って)、今は限り(もう未来は無いと)、よろづを思し捨てたり(全てを諦めていらっしやいます)。*「げんじのおとどのおおんおとうと」と此処で初めて、この古宮が源氏の弟とは即ち、桐壺帝の御子である事が示された。*「この宮を世の中に立ち継ぎたまふべく」は注に<東宮(冷泉院)を廃して八の宮を新東宮に立たせようとしたこと。物語には語られていなかったが、「須磨」「明石」巻ころの事件と想像される。>とある。確かに、このことと知れる記

述は無かったかと思うが、賢木巻末に「このついでに、さるべきことども構へ出でむに、よきたよりなり」と、思しめぐらすべし。とあって、時の弘徽殿太后が単に光君の追放だけでなく、より大きな陰謀を企てていたかの、思わせぶりの結びとなっていたのが、次巻に興味を繋ぐ作者の常套手段にしても、得体の知れない不穏な語り口の印象だったことを覚えている。その後、光君は須磨に明石と流浪して隠棲生活をしていたかに語られていたが、一方で野心を持ち続けていたことも記されていて、光君自身が何かを仕掛けたようではなかったが、朱雀帝が光君を呼び戻すに先立って、明石巻二章八段に「都の天変地異」として、故桐壺院の御霊出現と右家大臣の死去が語られていて、如何にも何かの比喩話めいた印象だったが、あれが右家の謀略失敗を示した文だったのかもしれない、と今更に改めて思う。明石巻の御霊降臨は三月十三日、と日付が明示されていたので、恐らくは実際の何かの事件に符合する記事なのだろう。*「あなたさまの御仲らひ」は冷泉皇太子を擁護する源氏光君を初めとする藤原左家勢力。*「かの御つぎつぎになり果てぬる世」は注に「冷泉帝の次には今上帝が即位。今上帝は朱雀院の御子であるが後に源氏の明石中宮が立ち、第一皇子の東宮が誕生している。」とある。今上帝の皇太子位を朱雀帝が自分の退位と皇太后の隠居を以て守ったらしいことは、濤標巻一章の故院追善御八講から御世替わりに至る記事にあったが、今から思えばその実態は政変の事態収拾だったとも読めるので、明石中宮の立后が当時からの密約である事を前提に、今上帝の立太子が光君に承認された、ような事情にも思える。*「また」は、話題を換える「そのほかに」などの副詞ではなく、話題を引き継ぐ「そして、それ以来」などの接続語、なのだろう。

かかるほどに(そうしている内に)、住みたまふ宮焼けにけり(お住みになっていた宮邸が焼けてしまいました)。いとどしき世に(重なる不幸に)、あさましうあへなくて(非常に落胆して)、移ろひ住みたまふべき所の(移住なさるべき所の)、よろしきもなかりければ(適当な邸が都に無かったので)、宇治といふ所によしある山里持たまへりけるに渡りたまふ(宇治という所に持っていらっしやった気の利いた山荘に引越しなされたのです)。思ひ捨てたまへる世なれども(諦めを付けなされた都暮らしだったが)、今はと住み離れなむをあはれに思さる(いざ離れるとなると感慨深いのでした)。

網代のけはひ近く(網代漁の場所に近く)、耳かしかましき川のわたりにて(その活気で騒々しい川の辺りの)、静かなる思ひにかなはぬ方もあれど(静かな隠棲暮らしに不向きな面もある山荘だったが)、いかがはせむ(仕方が無い)。「あじろ」は川を下る鮎の稚魚である氷魚(ひお)を一点に誘い込むV字型に打ち込んだ杭(網代木)と竹編を組み合わせた仕掛けのことで、平等院鳳凰堂近くの漁が有名だったらしい。宇治の網代で検索すると「料理旅館鮎宗」サイトに分かり易い説明ページがあって、その他のサイトの殆んどにもだが、参照歌として「柿本朝臣人麿、近江国より上り来る時、宇治河の辺に至りて作れる歌一首」と詞書された「もののふの(役人の) やそうぢかはの(八十氏、宇治川の) あじろきに(網代木に) いさよふなみの(漂ふ波の) ゆくへしらずも(行方知らずも)」(万葉集・巻3・264)、が示されている。「いさよふなみのゆくへしらずも」は「栄えていた近江国の役人も行方知れずで」自分もこの先どうなるか分からない「みたいな無常感らしく、さらに網代の仕掛けを「どうせ誰かに仕組まれた人生で」と見れば、宮の心象風景に重なる。作者はこの一文に、そういう効果を狙ったのだろう。「いかがはせむ」が効いている。

花紅葉、水の流れにも(花や紅葉や水の流れにも)、心をやる便によせて(気を紛らす頼りにして)、いとどしく眺めたまふより他のことなし(ますます以て物思いに耽る他にすることが無い)。

かく絶え籠もりぬる野山の末にも(このように世間から隔絶して籠もってしまった片田舎にも)、「*昔の人ものしたまはましかば(せめて妻が生きていらしたら)」と、思ひきこえたまはぬ

折なかりけり(と思ひ申しなさらない時はなかったのです)。 *「昔の人」は注に<八宮の心中。「昔の人」は故北の方。「ましかば」反実仮想。>とある。

「見し人も宿も煙になりにしを、何とてわが身消え残りけむ」(和歌 45-04)

「煙と消えた妻と家、わが身ばかりがなぜ残る」(意識 45-04)

*注に<八宮の独詠歌。「見し人」は北の方。「宿」は京の邸宅。>とある。何て言うか、そのまんまの歌なんだろうか。そのまんまで十分に侘しい、ということに反論は無いが、実相を知らない私には設定でしかないので、本当に捻りが無いのなら、逆に野焼きの風景でも語れば良いのに、とか思ってしまう。このままでは、まるで下の「思し焦がるるや」の枕だ。ともあれ古宮は、今は宇治の山荘暮らしらしいが、失脚後暫くは都の宮邸暮らしをしていたようで、子供たちも都生まれで、奥方は次女を産んだ後に亡くなったとのことだが、娘たちは何歳まで都暮らしだったのか。宮の事情はだいぶ分かってきたが、話はまだ今に繋がらない。

生けるかひなくぞ(生き甲斐も無いままに)、思し焦がるるや(宮は故君を思い焦がれなさるのです)。